

(様式2)

校種	①・中 どちらかに○	学校番号	63	学校名	宇都宮市立岡本小学校
----	---------------	------	----	-----	------------

## 令和7年度 学習指導に関する取組

### 1 学習指導上の主な実態

(1) 国・県・市の学力調査などから

- ・国語では、「書くこと」において、指定された長さで書くことや段落構成、内容など複数の条件を満たして文章を書く問題の正答率が高く、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係をまとめて書く活動や調べたことをまとめて事実やそれを基にした考えを書く活動が十分に取り入れられてきた効果が表れてきている。また、6年生は「話すこと・聞くこと」の話し手の話した内容について適切なものを選ぶ設問の正答率がやや低く、相手意識をもち聞き手に分かりやすい構成で話し手の育成や話し手の伝えたいことを意識して中心を捉える聞き手の育成に課題が見られる。
- ・算数では、「データの活用」において、県や市の正答率と比較すると高く、グラフを見て、どのようなことがわかるのか（縦軸や横軸、1目盛りの数量、変化のしかた）などを読み取るポイントや手順を理解し正しく読み取れていても、そのデータが何を表しているのかを説明することに課題が見られた。
- ・社会では、教科用語等の理解が不十分な部分もあり、今までに学習した内容と、資料や地図などを関連させて考えるなど、多角的な見方や考え方をすることに課題が見られる。
- ・理科では、実験用具の名称や特性の理解が不十分な単元があり、条件統一という視点で複数の資料の違いを捉え、表現することに課題が見られる。
- ・教科に関する調査から、各教科に関する共通課題として、題意を正しく理解して問題解決にあたることや教科に応じた重要語句の意味を正しく理解して、根拠を明確にして文章で説明する問題、情報を正しく整理する力や目的や意図に応じて伝えること明確にして書くことやより説得力のある文章を書く力、表やグラフの特徴を適切に読み取り説明する力を育成していく必要があると考える。

(2) 国・県・市の児童生徒質問紙・学校質問紙などから

- ・「学校の勉強がどの程度分かりますか」の質問に対する肯定的割合については、4学年中3学年で市の割合よりも高い。また、「学習していて、おもしろい、楽しいと思うことがある」の肯定的割合は、全学年で市の割合よりも高い。さらに、「勉強していろいろなことが分かったり、勉強になったりすることはうれしい」に対する肯定的割合は全学年のうち4つの学年で市の割合よりも高く、100%に近い。これらのことから、学ぶ楽しさを味わいながら、意欲的に学習に取り組むことができていると考えられる。
- ・「自分の考えを、理由を挙げながら話すことができる」に対する肯定的割合は、4学年中3学年で市の割合より高く、「物事を比べながら考えている」についても4学年全てで市の割合より高く、根拠をあげながら筋道を立てて話したり書いたりする意欲が高まってきていると考えられる。
- ・家庭での学習について、「宿題をきちんとやり提出している」の肯定的割合は、全学年中5学年で市の肯定割合を上回っているが、「自分で計画を立てて家庭学習に取り組んでいる」の肯定的割合は、市の肯定的割合を上回っている学年もあるが、下回っている学年も複数ある。また、学校の授業以外の学習時間については、河内学校園で定める目安の時間を達成しているが、休日には学習時間の短い児童の割合も多いので、今後も家庭への啓発を図る必要があると考える。
- ・「読書」については、「いろいろな種類の本を読むことは楽しい」と答える肯定的割合が、全学年全ての学年で市の割合を上回っているが、読書をする児童としない児童の二極化が見られる。本を読む時間よりも、スマートフォンやタブレット、パソコンを利用した動画やゲームに費やす時間が長くなってきている傾向が見られる。

(3) 授業等への取組状況から

- ・体験的な学習や問題解決的な学習に、意欲をもって取り組むことができる。
- ・自ら課題をもち、自ら考えて行動することに自信がもてず、消極的な児童が多い。
- ・授業に臨む基本的な学習態度や学習技能は身に付きつつあるが、その定着には個人差があり個別の指導を要する。
- ・自分の考えはもっているが、考えを適切な言葉としてうまくまとめて表現できなかつたり、他者に伝えることに消極的になってしまったりする児童が一定数いる。

- ・宿題などの決められた課題はやっているが、自主的な学習の取り組みには個人差が大きく、継続した指導が必要である。

## 2 今年度の重点目標

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進

- ・「宇都宮モデル」を活用した学び合う授業の創出
- ・1人1台端末などのデジタル機器の効果的な活用
- ・教科横断的な学習による「生きる力」の育成

## 3 今年度の取組

学び合う楽しさを味わう授業づくり

### (1) 「宇都宮モデル」を活用した学び合う授業の創出

以下に学校全体で取り組むことにより、基礎・基本及び言語能力を習得させるとともに、他者と協働しながら、課題を解決することの楽しさを味わわせる。(すべて通年)

・学級経営を基盤とし、地域学校園で設定した「授業のやくそく」をもとに、返事をしたり、話をしっかりと聞いたり、自分の考えや意見をしっかりと発表したりするなど、学習態度の指導をすることにより、「学びに向かう集団づくり」を推進する。

★振り返りの目的を確認し、振り返りを行う際の視点の焦点化を図る。

★対話の充実のために、「話形」等のモデルを掲示し、上手に使えるよう指導する。

★□「はっきり」の場面においては、教材提示の工夫により、「知りたい」「やってみたい」といった児童の追究意欲を高めるとともに、解決への見通しをもたせる。

★□「じっくり」の場面においては、協働的に児童同士が交流したり自分自身に問い直したりして問題解決にあたる場面を設け、課題を解決する時間を十分に確保する。

★□「すっきり」の場面においては、児童が伝え合ったり、書いたりしたことをもとに課題に対する結論をまとめ、見通しに対する振り返りを文章で書かせる時間を設けるなど、「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価に取り組む。

### (2) 1人1台端末などのデジタル機器の効果的な活用

以下に学校全体で取り組むことにより、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図りながら「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進する。

(すべて通年)

★□児童の発達の段階を踏まえながら、学習内容や学習活動に応じて1人1台端末を効果的に活用し、授業の質的向上を図る。

★各種学力調査の結果やA I型個別学習ドリルの取組状況等、教育データのきめ細かな分析を通し、児童の基礎・基本の定着に係る課題とその要因や、学習への意識等を把握した上で、授業における指導改善を図る。

### (3) 教科横断的な学習による「生きる力」の育成

以下に学校全体で取り組むことにより、これからの時代をたくましく生き抜くことのできる知・徳・体のバランスのとれた力を育む。(すべて通年)

□学級活動及び児童会活動等において、学級や学校生活上の課題を見出し、多様な意見のよさを生かして合意形成を図れるようにする。

★縦割り班活動や児童会活動における活動内容の工夫により、多様な人々と協働して課題を解決する中で、児童が自己のよさに気づき、自己有用感を高めることができるようにする。